表 1　心臓手術予後調査表のまとめ

		PS	ECD			PS	ECD
I．現在の生活状況				(3)現在症状	なし	5	2
B．幼　児					あり（風邪）	2	
(1)手術後の発育	(イ)よくなった	1	1	(4)手術の効果	(イ)よくなった	7	1
(2)知能の発達	(ロ)普　通	1			(ハ)余り変らない		1
(3)同じ年頃の子と比し	(イ)同じにあそぶ	1		(6)退院後	(チ)ペースメーカー植込		1
(4)運動能力	(イ)増加した	1		(7)結婚と妊娠	結婚した		1
C．学校にゆく年令					妊娠していない		1
(1)手術後体の発育	(イ)よくなった	2		(9)心臓薬	(ロ)のんでいない	6	2
	(ロ)変らない	3			不明	1	
(2)術後精神的性格的に	(イ)明るくなった	2					
	(ロ)活発になった	1					
	(ハ)あまり変らない	2	1				
(3)現　在	(イ)小学校	3	1				
	(ロ)中学校	1					
	(ハ)高等学校	1					
(4)学校に	(イ)行っている	5	1				
(5)体育は	(イ)普通にしている	5	1				
D．職業について							
(1)職　業	(ロ)ついていない		2				
(2)現在の体調	不明→(1)	1					
	(2)→(1)	1	1				
	(1)→(1)	4	1				
	不明	1					

PS：7/15 例（46.7%）　♂：♀＝5：2
2才8ヵ月～11才11ヵ月
Valvulotomy　6例
Radical ope　1例

ECD：2/5 例（40%）　♂：♀＝1：1
5才～24才10ヵ月
Radical ope　2例
合併症1例：A-V block
（家婦）　ペースメーカー植込み

注：ECD の Radical ope は死亡1例有り。

（1978. 2. 25　日大小児科）

いて A-V block の合併があり，現在ペースメーカー植込みをうけているものが手術効果良好と答え，特に問題のない例があまりよくならないと回答している。これは，術前の状態の違いによると思われた。今回はアンケート調査のみであるが，次回は ECG，胸部X線等の検討を予定している。

小児心疾患の長期管理基準の設定に関する研究

1.　肺動脈弁狭窄症手術予後調査成績
2.　心内膜床欠損症手術予後調査成績

滋賀医科大学第1内科　河　北　成　一
国立愛媛病院循環器科　水　野　裕　雄

国立愛媛病院において肺動脈弁狭窄症及び心内膜床欠損症の昭和50年迄の手術例は30例であり，20例は追跡調査は可能であったが，9例は音信不明であった。肺動脈弁狭窄症で術後調査可能であったものは12例で，心房中隔欠損症，心室中隔欠損症を合併したもの及びファロー四徴症は除外した。なお1例は術後40日目に敗血症で

死亡したので本統計には含まれていない。心内膜床欠損症例のうち調査可能なものは8例で，1例は術後24時間に死亡した。

I. アンケート調査成績

1. 肺動脈弁狭窄症　12例，術後3～7年

性別は男7例，女5例である。手術時年令は1～6才：7例，7～12才：3例，13～15才：0，16～20才：2例である。通学児は小学生7例，中学生例2，高校生1例で，2例は社会活動を行なっている。術後3年経過したもの1例，4年4例，5年5例，6年1例，7年1例で，現在の体調は術前に比して術後は全例著明に改善し，手術効果は著効であり，在学生は全員体育を普通に行なっている。

2. 心内膜床欠損症　8例，術後3～10年

性別は，男2例，女6例である。手術時年令は7～12才：5例，13～15才：0，16～20才：2例，21才～：1例で前者に比し比較的高年令である。通学児は小学生：1例，中学生：3例，高校生：1例で3例は社会活動を行なっている。術後3年を経過したもの1例，4年1例，5年3例，7年1例，8年1例，10年1例で，現在の体調は術前に比し術後は7例は著明に改善し，手術効果の著明であったもの6例，やや有効のもの2例となり，在学生は全員体育を普通に行なっている。

II. 胸部X線

術前は手術1ヵ月，術後は1年を経過して撮影が行なわれた。術前，術後における心胸廓係数（CTR）を比較した。CTRは55％を正常限界とした。

1. 肺動脈弁狭窄では術前55％以上を示した例は1例であり，本例は術後正常となり，1例は術前正常であったが，術後60％と心拡大を示した他は全例有意の変動をみず正常範囲内にあった。

2. 心内膜床欠損では6例がCTR 55％以上の心拡大を示し，術後何れの症例もCTRの縮少が認められたが，心拡大の著明であった3例はなおCTRは55％以上であった。

III. 心電図

術前は手術前1ヵ月，術後は1年を経過して撮影が行なわれた。右室肥大の指標としてRV_1を基準とした。

1. 肺動脈狭窄では全例右軸偏位を示しRV_1が10 mv以上を示した例は9例で，術後1例を除きRV_1は著明な低下を示している。

2. 心内膜床欠損ではRV_1が10 mv以上を示した例は4例で，術前3例は低下している。

IV. 心臓カテーテル成績

肺動脈狭窄の術前，術後の成績を比較検討した。術前は手術前12～6ヵ月，術後は術中に測定されたものである。

1. 右室圧　収縮期圧70 mmHg以上を手術適応とすると術前では10例は高値を示すが，手術終了直後は少くとも全例70 mmHg以下に下降する。

2. 右室・肺動脈圧較差　50 mmHg以上を対象とすると，9例は高値を示し，手術直後では低値を示すが，なお15 mmHg以上を呈したものは4例に認められた。

V. 総　括

先天性心疾患のうち肺動脈弁狭窄12例，心内膜床欠損8例について手術効果を遠隔成績の面より疫学考察を加えた。肺動脈弁狭窄は全例手術効果を認め自覚症状，心電図，血行動態において改善を示した症状が多い。心内膜床欠損でもほぼ同様の手術効果がもたらされた。全例術後においては心臓薬の服薬をしていないが，現在3例は通院中である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

国立愛媛病院において肺動脈弁狭窄症及び心内膜床欠損症の昭和 50 年迄の手術例は30例であり,20例は追跡調査は可能であったが,9例は音信不明であった。肺動脈弁狭窄症で術後調査可能であったものは 12 例で,心房中隔欠損症,心室中隔欠損症を合併したもの及びファロー四徴症は除外した。なお1例は術後 40 日日に敗血症で死亡したので本統計には含まれていない。心内膜床欠損症例のうち調査可能なものは 8 例で,1 例は術後 24 時間に死亡した。